

第 20 回 準備の継続は力なり

2023 年 4 月 20 日

今回は「準備の継続は力なり」と題してお話しいたします。「継続は力なり」は有名な言葉であり、皆さんもご存知だと思いますが、「準備」とは不思議に思うかもしれません。私は「準備の継続」と考えております。ここで言う「準備」とは、教員であれば、例えば授業の準備のことです。教室で生徒から質問があっても即座に答えられるようにしておく準備のことです。勤め人であれば、仕事の準備のことです。明日取引先と重要な交渉があれば、資料を集め、それをまとめて交渉の際に簡潔に分かり易く、しかもアピールできるようにし、取引先からの質問にも明快に答えられるようにしておく準備のことです。スポーツで言えば、準備とは練習のことです。野球で言えば、バッティング練習、守備練習、ピッチング練習のことです。ただ、練習以外に重要な準備があるのですが、それは後でお話し致します。日本の伝統武芸や芸能文化について言えば、準備とは（お）稽古のことです。寒稽古という言葉もありますね。誰でも分かっていることですが、このように「準備」とは重要な、必要欠くべからずのものです。「準備」は「努力」という言葉に置き換えてもいいと思います。そこで私自身が経験した印象的な「準備」について、二つの体験を紹介したいと思います。



一つは、私が青山学院大学の文学部英米文学科 4 年の時の 6 月に、教育実習を行った時の経験です。青山学院は戦前に英語師範科があり、旧制中学校（現在の高等学校）の英語教員の養成もしておりました。そういう関係からか、教育実習先は大学が紹介してくれました。私のほかに、大学から女子学生二人の計 3 人で、東京都杉並区の区立中学校で教育実習を行いました。最初の日に、私が 3 人を代表して校庭での朝礼で挨拶をし、もう一人の女子学生が職員室で先生方に挨拶をすることになっていました。十分に準備して挨拶の言葉を用意しておりましたが、生憎、当日は雨で朝礼はなくなってしまい、残念な結果におわりました。天気のことなので仕方がありません。私は 2 年生のクラス担任の英語の先

生が指導教官となり、女子学生は1年のクラス担任の英語の先生が指導教官となりました。教育実習も順調に進み、最後に、「発表授業」があり、大学から教育実習担当の先生が来て、指導教官3名と教育実習生の前でいよいよ発表授業を行うこととなりました。

私はこの時完璧な準備をして授業に臨みました。それまでの私の人生の中でも一番準備して臨んだものの一つだと思います。綿密な計画を立て、文法の説明なども準備し、分刻みのスケジュール通りの、完璧な授業となりました。実習生全員の「発表授業」が終わり、応接室のようなところで、懇談会がありました。この時、大学から来た教育実習担当の先生から、「説明が上手かった」との発言を頂き、また、実習指導教官からも、「授業全体にわたってよかった」との発言を頂きました。私は、大学時代は人前で話すことはそれほど上手ではありませんでした。しかし、私はこの時、「準備」を完璧にすれば、「緊張することもなく、自信をもって、堂々とできる」ものだと思います。遅いか早いか分かりませんが、大学4年の6月に、「準備は重要で、継続していけば力となる」ことを確信いたしました。この時の経験が、私の英語教員生活の「糧」となりました。

次の私の印象的な「準備」は2006年の埼玉県教育委員会の仕事で、高校、中学校、小学校、幼稚園、養護学校の全ての埼玉県の公立学校で20年勤めた先生を対象にした「研修」（埼玉県教員20年経験者研修）の講師を務めた時のことです（2006年から2008年まで3年間講師を致しました）。この研修はかなり大掛かりで、そのうちの一つに、埼玉県にある大学で講座（2006年は6大学37講座）を受けもつものがあり、獨協大学では3名の先生が担当し、私もその一人に選ばれました。8月に行われ、私の講座には高校教諭23名、中学校教諭12名、小学校教諭6名の計41名の先生方が参加されました。1日で3コマ270分の講義です。1コマ90分の講義でしたら、それほど準備を十分にしなくても、今までの経験で、「十分に楽しく、満足の行く講義」はできますが、先生方を相手に、270分の講義ではさすが十分な準備をしないととても無理です。そこで、今回も十分時間をかけ、準備を徹底的に行いました。教材は全て映画を使用し、「マスメディアの一つである映画を通して何を学ぶことが出来るか」をテーマに講義をいたしました。1時間目は「生きた言葉を学ぶ」で、日常生活で使われている英語の習得、2時間目は「異文化理解」で、異文化を理解し、複眼的思考法を身に付ける重要性、3時間目は「映画で一瞬の判断、理解を養う」で、映画を通して考える力・注意力などを養うことを目的といたしました。一つ例をあげますと、1時間目の「生きた言葉を学ぶ」では、先ず、映画（*Shine*）の一場

面を、日本語字幕で見せ、次に、英語字幕で見せ、最後は英語音声のみの字幕なしで講義を進めました。映画の一場面で、英語でない言葉が時々使用されていました。東ヨーロッパから逃れてオーストラリアに移住したユダヤ人一家の物語です。私は準備をしている時に、これは「どこの国の言葉か」という質問があるなと思い、調べてみたら、東ヨーロッパに住んでいたユダヤ人が話すドイツ語に近いユダヤ語で、イディッシュ語（Yiddish）であることが分かりました。案の定、この言葉について質問があり、私は心の中で「ズバリの的中だ」と思い、気持ちよく説明いたしました。準備を十分にしていれば、ここは質問があるなというのは分かります。こうして、3 コマ 270 分の講義を無時終え、先生方の満足した顔を見て嬉しく思い、研修は終わりました。評判がよく、次の年の研修講座では、参加者が飛躍的に増加し、大教室で行いました。教育実習と同様に、中堅教員に対する研修でも、徹底的な「準備」をすれば、完璧な講義ができることが証明されました。「準備（努力）は報われる」ということです。ただ、中途半端な、楽な「準備」ではダメです。こういう準備では、いくら「継続」しても力にはなりません。この点が重要ですが、なかなかできるものではありません。大学で授業をしていた時に、学生の予習（準備）が中途半端なものが多かったようにも思います。以上、私の二つの「体験」を通して、「準備」の重要性を具体的に述べさせて頂きました。お分かりになったと思います。

それでは、私の体験談だけでは説得力に乏しいと思います。私と比較しておこがましいのですが、最後にスポーツ界で活躍した方についてのお話を致します。メジャー・リーグで大活躍したイチローさんです。彼はあの細身の身体で、メジャー・リーグで1 シーズン 262 本の最多安打や首位打者を2 回、10 年連続で200 本安打、メジャー・リーグで3089 安打、日米通算4367 安打（世界記録）を打ち、長い期間に亘ってメジャー・リーグで大活躍致しました。このことは誰もご存知のことと思います。私はテレビで、イチローさんの特別番組を見た時に、彼が集団練習（ランニング、バッティング練習、守備練習など）が始まる前にグラウンドに来て、一人で長い間準備運動を十分して集団練習に望んでいる光景を見ました。野球の専門家ではありませんが、こういった準備（努力）が、あの細身の身体にもかかわらず、故障をしない体を作り上げ、長い期間に亘ってメジャー・リーグで活躍できたのではないかと考えています。いくら才能があっても故障ばかりしては活躍できません。イチローさんが、「努力をしないでできる人のことを『天才』だと言うのなら、僕は『天才』じゃありません。努力をした結果、できるようになる人のことを『天才』というならば、僕はそうだと思います。人が僕のことを努力もしないで打てると思うなら、それは間違いです」と言ったことを今でも覚えております。でも、これはなかなかできるも

のではありません。こういった準備（努力）の継続がイチローさんを偉大にしたのではないのでしょうか。「準備の継続は力なり」です。今からでも遅くありませんので、皆さんも始めてみてはいかがでしょうか。

（次回は6月10日ごろを予定しています）